

## 『逆修説法』の概要（1）

齋 藤 蒙 光

### 【抄録】

『逆修説法』は、中原師秀の逆修法要における法然の説法の記録であり、建久五年（1194）頃の成立であると推測される。全六回の説法は、それぞれが、阿弥陀仏の仏身や名号、光明、寿命、依正二報などの諸々の功德を説明する「仏徳讃嘆」と、浄土三部經の要点を挙げながら善導、法然の念仏思想を説き示す「経徳讃嘆」との、二部構成となっており、特に後者では同じ話題が繰り返し説かれる。大部の資料であるため、何処に何が説かれているのか、概要すら把握し難い。拙稿は、その手助けとなるよう、『逆修説法』の科文、要旨、頁数を列記したものである。当初、個人的資料として作成したが、『逆修説法』研究班の成果や、当センター諸研究員の手による資料を活用させていただき、さらに内容を充実させることができた。

**キーワード：**法然、逆修説法、阿弥陀仏、念仏、往生

本稿は元々、『逆修説法』の概要を把握するため、個人的に作成した資料である。当センターの『逆修説法』研究班へ参加して以降、本庄良文氏が作成された科文や市川定敬氏が打ち込んだ本文データ、さらには研究班の成果をも活用させていただき、内容をより整備することができた。もっとも、科文や説示内容の要約などは、正確さや緻密さよりも見やすさや簡潔さを優先しており、学術的とはいえない。

基本的に善照寺本『漢語灯録』所収の『逆修説法』を底本とし、今回は前半の三七日までを取り上げた。各項目の後に適宜（ ）に囲んで、以下の八種の資料の頁数を記入した。

① 法然院本『師秀説草』

藤堂恭俊博士古希記念会『浄土宗典籍研究』資料編、同朋舎出版、1988年。

影印および翻刻。

② 専修寺本『西方指南抄』所収「法然聖人御説法事」

法然上人研究会『法然上人研究』1～2号、1992～3年。翻刻。

③ 安土浄厳院本『無縁集』

宇高良哲編著『『逆修説法』諸本の研究』文化書院、1988年。翻刻および影印。

- ④ 安土浄厳院本『漢語灯録』所収『逆修説法』 『『逆修説法』諸本の研究』翻刻および影印。
- ⑤ 大谷大学恵空本および義山開版本『漢語灯録』所収『逆修説法』  
『『逆修説法』諸本の研究』前者は翻刻、後者は影印。
- ⑥ 善照寺本『漢語灯録』所収『逆修説法』  
浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成』1、浄土宗、2011年。影印。
- ⑦ 『昭和新修法然上人全集』所収「十三、逆修説法」（善照寺本を底本とする。）
- ⑧ 伊藤唯真監修、真柄和人訳注『傍訳逆修説法』四季社、2006年。

### 一七日 三尺立像の阿弥陀、『双巻経』『阿弥陀経』

○仏徳讃嘆 仏身について（①7、②1-93、③77、④5、⑤211、⑥141、⑦232、⑧11）

#### 1. 真身・化身の二身論

仏身には種々あり、一身、二身、三身、四身、ないし『華嚴経』では十身を説く。

ここでは真身・化身の二身を挙げて讃嘆する。この二身は『無量寿経』三輩段に説かれる。

##### (1) 真身…真実の仏身

①『無量寿経』に基づく説明…四十八願と六度万行による、修因感果の身である。

②『観経』第九真身観に基づく説明

A 身量…「六十万億那由他恒河沙由旬」

B 白毫…「眉間の白毫、右に旋れり、五須弥山の如し。」

一つの須弥山の高さは、海より上と下とが、それぞれ八万四千由旬である。

C 仏眼…青蓮慈悲の眼は、「四大海水の如くして、青白分明なり。」

D 光明…「身の諸の毛孔より光明を放つこと、須弥山の如し。」

「頂に旋れる円光あり、百億三千大千世界の如し。」

「八万四千相有り。一一相に各八万四千好有り。一一好に八万四千の光明有り。

其の一一の光明、遍く十方世界を照らし、念仏の衆生を攝取して捨てたまわず。」

E 身色…「夜摩天の閻浮提金の色の如し。」

諸仏は常住不変の相を顯すため、白ではなく、金色を現わす。（『観仏三昧経』）

真言宗では、本尊の色が法にしたがい異なるが、それは方便の化身の色である。

よって、仏像を造る場合でも、金色に造ることが決定往生の業因となる。

##### (2) 化身（①9、②1-94、③79、④7、⑤214、⑥143、⑦233、⑧21）

「何も無いところに突然出現する」のが「化」である。機に応じて、身量は大小異なる。

『観経』「或いは大身を現じて虚空の中に満ち、或いは小身を現じて丈六、八尺なり。」

化身には多種ある。

- ① 円光の化佛…『観経』真身観「円光の中に百万億那由他恒河沙の化仏あり。一一の化仏、衆多無数の化菩薩を以て眷属となす。」
- ② 摂取不捨の化仏…『観経』真身観の「光明遍照～摂取不捨」は真仏の摂取である。  
三十六億の化仏が、真仏と共に十方世界の念仏の衆生を摂取する。
- ③ 来迎引接の化佛…『観経』九品に説かれる化仏で、九品それぞれに数の多少がある。  
『観経疏』散善義によれば、下下品にも来迎はあると解釈できる。
- ④ 小身の化佛…行者のために本尊が小身の化仏を現す。  
それを描いたのが鶏頭摩寺の五通菩薩の曼荼羅や智光曼荼羅である。  
また、新生の菩薩に教化、説法するため、阿弥陀仏が化して小身を現す。

## 2. 阿弥陀仏像の造立 (①11、②1-95、③83、④9、⑤217、⑥146、⑦234、⑧31)

今回、施主が祇園精舎の姿を受け伝え、三尺の来迎引接の像をお造りになった。

### (1) 数ある仏像の中でも、来迎引接の形像を造るべき理由

講堂での説法、池水での沐浴、菩提樹下での成等正覚、光明遍照摂取不捨などの像を彫刻したり、描くのはみな往生の業だが、来迎引接の形像は特にその便宜を得る。

極楽の依正二報を見聞きするのは、まず来迎に預かり、彼の国に往生してからのものである、往生極楽の志のある者は来迎引接の形像を造り、「来迎引接の願」を仰ぐべきである。

### (2) 第十九「来迎引接の願」の解釈、阿弥陀仏が来迎する理由

(①12、②1-96、③83、④11、⑤219、⑥147、⑦234、⑧39)

#### ① 来迎正念のため

阿弥陀仏が大光明を放って現前し、加持護念するため、行者には三種の愛心が起こらない。

『称讃浄土経』「慈悲加祐して、心をして乱れざらしむ。～即ち往生を得て不退転に住す。」

『阿弥陀経』「阿弥陀仏、～現に其の前に在す。是の人終わる時、心顛倒せずして～」

「令心不乱」「心不顛倒」は、阿弥陀仏が行者を「正念に留まらせる」という意味である。

よって「臨終正念だから来迎」ではなく、「来迎があるから臨終正念」なのである。(静照

『阿弥陀如来四十八願釈』)

#### ② 道の先達のため (①14、②1-96、③85、④11、⑤220、⑥148、⑦235、⑧44)

沙門志法の遺書によると、この世で造った形像が極楽へと先導する。(『往生浄土伝』)

『薬師経』に、薬師瑠璃光如来の名号を聞けば、命終時に八菩薩が道を示すとある。

良源も第十九願を「現前先導の願」と名付けている。(『極楽浄土九品往生義』)

#### ③ 対治魔事のため (①15、②1-97、③87、④13、⑤222、⑥150、⑦235、⑧50)

真言の誓心や天台の四種三昧、菩薩の修行などが成就する時には、悪魔の障難が伴うという。

まして凡夫が往生行を修しても、魔の障難を対治できなければ、往生は難しいはずである。

だが、阿弥陀仏が光明を輝かして現前して下さるので、魔王は行者に手出しできない。  
これらの義によって考えると、仏像を造る際には、来迎の像がよい。

## ○経徳讃嘆

### 1. 立教開宗（『選択集』第一章と関連）

(1) 浄土三部経（①16、②1-98、③87、④13、⑤223、⑥151、⑦235、⑧56）

①「三部経」の前例…大日、弥勒、鎮護国家、法華などに、それぞれ三部経がある。

② 往生浄土に関する、諸経の分類

A 浄土の三部経、弥陀の三部経…『双卷無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』

ある師は、『鼓音声経』を加えて四部とする。

B 往生浄土に言及する経…四十卷本『華嚴経』、『法華経』、『大日経』、『金剛頂経』

C 往生浄土を全く説かない経…『大般若経』、『涅槃経』、小乗経など

往生浄土の法を説くことは浄土三部経に尽きる。よって浄土一宗の所依とする。

(2) 浄土宗（①18、②1-98、③89、④15、⑤225、⑥152、⑦236、⑧61）

① 浄土の法門に「宗」の名を立てる前例

元曉、慈恩、迦才、善導が「宗」の語を用い、特に迦才と善導は浄土一宗を専らにする。

② 浄土宗の師資相承

菩提流支、慧寵、道場、曇鸞、法上（ここまで『安楽集』）、道綽、善導、懷感、少康。

③ 法門の浅深、広狭、相応不相応

A 真言や天台などの諸大乘宗は広く深いので、時機不相応。

B 俱舍や成実などの小乗宗は広く浅いので、時機不相応。

C 浄土宗は狭く浅いので、唯一、時機相応。

### 2. 『無量寿経』その一（①20、②1-99、③91、④17、⑤228、⑥155、⑦236、⑧71）

(1) 概容…阿弥陀仏の修因と感果の功德

① 四十八願…上巻の初め。阿弥陀仏の因位の発願を説く。

② 浄土莊嚴と衆生往生の因果…上巻後半から下巻まで。阿弥陀仏の果位の願成就を説く。

(2) 衆生往生の因果（往生行）

①「念仏往生の願」成就文…「諸有衆生、聞其名号」の文（説明なし）

② 三輩の文（『選択集』第二・四章と関連）

A 善導の「就行立信」の文に依る解釈…三輩の業因について正雑二行を立てる。

a 正行

正定業…三輩ともに「一向専念」と説かれる。正定業であり阿弥陀仏の願に従うから。

助業…『群疑論』により「起立塔像」を解釈すると、阿弥陀仏像の造立は往生の助業。

b 雑行 (説明なし)

B 善導の「望仏本願～」の文を下敷きとする解釈。

三輩の中でそれぞれ菩提心等の他の善を説くが、前述の本願に照らし合わせれば、その本意は、専ら弥陀の名号を称念させるところにある。だから「一向専念」と説く。

「前述の本願」は、四十八願の中の第十八願を指す。

「一向」は二向三向に相對する語。念仏とともに他の善を修するのは「一向」に反する。

### 3. 『阿弥陀經』その一 (①22、②1-100、③93、④19、⑤230、⑥157、⑦237、⑧79)

(1) 概容…①極樂世界の依正二報、②一日七日の念仏による往生、③六方諸仏の証勅護念

(2) 往生行…この經では他の行を説かず、選んで念仏の一行を説いている。

(3) 念仏多善根の文 (『選択集』第十三章に關連)

經文「不可以少善根福德因緣得生彼國」

「阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること、若しは一日乃至七日、一心不乱なれば、～是の人終わる時、心顛倒せずして、即ち往生することを得。」

他の善は少善根であり、往生はできない。念仏は多善根であり、必ず往生できる。

善導「極樂は無為涅槃界なり、隨緣の雜善、恐らくは生じ難し。故に如来、要法を選びて、教えて弥陀を念ぜしめ、専らにして復た専らならしむ。」

### 4. 小結

(1) 念仏往生…弥陀如来の本願の行、教主釈尊の選んだ要法、六方諸仏の証誠する説である。

(2) 他の行…そうではない。

## 二七日 弥陀、『觀經』『同疏』一部

○**仏徳讃嘆** (①23、②1-100、③95、④19、⑤232、⑥158、⑦238、⑧89)

### 1. 阿弥陀仏

ここより西方、十萬億の三千大千世界の先にある七宝莊嚴の地、極樂淨土の教主である。

その身色は「夜摩天閻浮檀金の色の如し」、身量は「六十萬億那由他恒河沙由旬」である。

### 2. 仏徳讃嘆と經徳讃歎

仏の功德は説き尽せないが、「面善円淨如満月」などと伽陀を誦して称揚讃嘆すればいい。

仏の功德を讃えるのと經の意を解釈するのは同じことであり、疏の解釈と經の解釈も等しい。

よって經について、形式に則って讃歎する。

○経徳讃嘆 『観経』 その一

(『選択集』第十二章と関連、①24、②1-100、③95、④21、⑤233、⑥159、⑦238、⑧89)  
中国の人師が経を解釈する際には「大意」「釈名」「入文解釈」を説くが、今は省略する。  
経の要点を挙げれば、「定散二善を修して往生すること」と「名号を称えて往生すること」。

1. 定散二善

(1) 定善…韋提希の請いに応じて釈尊が説いた、十三種の観想により、現身で仏を見る。

① 日想観

行相…二月と八月の彼岸の夕日を見て、目を閉じ日を想い描く。それを繰り返す。

成就…太陽の無いところでも、心に想い描けば見えるようになる。

目を閉じた時のみ見えるのは、まだ観想の浅い成就である。

目を閉じても開けても、自在に太陽が見えるようになるのが、観想の深い成就。

この日想観成就の時に阿弥陀仏が現れることは、ほぼ有り得ない。

十三観の初めに置く理由…A光明に慣れる、B罪障の軽重を知る、C極楽の方処を知る

② 水想観 (①26、②一、③97、④23、⑤236、⑥161、⑦238、⑧105)

行相…瑠璃地を観想するための準備として、まず水を見て、目を閉じ想い描く。

成就…観の浅深は前の日想観と同じ。

水を自在に見ることが出来たなら、水を氷、瑠璃地へと変化させて観想する。

③ 地想観

成就…前の水想観が順序通りに成就すれば、地想観も成就する。

瑠璃地の下の金幢について、善導のみが「無量無数」と説き、他師は八角の柱一本だという。

この観が成就する時には、釈尊の『法華経』説法時のように娑婆の地面が瑠璃地に変化する。

釈尊は「未来世の衆生のために、この地観想を説く」と言い、特に勧めておられる。

『観経疏』『定善義』は、地想観の解釈で、『清浄覚経』所説の「信不信の因縁」を引用する。

④宝樹⑤宝池⑥宝楼観

これら全てを解説し尽くすことはできないが、経や疏には詳しく説かれている。

依報を讃嘆するのも、つまりは阿弥陀仏観を讃嘆することになる。

⑩観音⑪勢至観

極楽には無量の聖衆がいるが、代表はこの左右の二菩薩であるから、他の菩薩は省略する。

⑫普想観

行相…いまだ臨終の時でなくても、自身の往生を観想する。

真言宗大安寺の勝行上人のように、往生観を修さなくても今生で極楽に詣でることがある。

まして往生観を修する者は尚更である。

また唐の明曠は十二種の観を成就した。我々も観じようと望めば、必ず成就するはずだ。

『観経』 雑想観「～彼の如来の宿願力の故に、憶想有る者、必ず成就することを得。」



### ⑬雑想観

行相…阿弥陀仏の大身量を縮めて、一丈六尺や八尺のような小身を観想する。

(2) 散善 (①30、②1-100、③103、④25、⑤246、⑥165、⑦240、⑧125)

散善とは三福九品である。

ただし天台智顗などは、十三観の上に九品の三輩観を加えて、十六観想と名づける。

定散二善を二分して、十三観を定善、三福九品を散善と名づけるのは、善導一人である。

#### ① 三福

##### A第一福 (世福)

a 孝養父母…名声を高めるのが「世間の孝養」である。

父母を勧めて仏道に入らせるのが「出世の孝養」である。

b 奉事師長…師の恩は父母の恩にも勝る。

雪山童子や常啼菩薩は、仏法のために身を投げ出した。

c 慈心不殺、修十善業 (説明なし)

##### B第二福 (戒福) (①32、②一、③103、④27、⑤248、⑥166、⑦240、⑧128)

a 受持三帰 (説明なし)

b 具足衆戒…小乗戒は僧が二五〇戒、尼が五〇〇戒。

大乘戒は七衆共通で、十重四十八軽戒を受ける。

c 不犯威儀…戒の中でも軽いものが「威儀」に当たる。

大乘に八万の威儀、小乗に三千の威儀がある。

##### C第三福 (行福) (①32、②一、③105、④27、⑤249、⑥167、⑦240、⑧130)

a 発菩提心…諸宗でそれぞれ異なる。

浄土宗の菩提心は、浄土に往生してから四弘誓願を成就しようと願う。

b 深信因果…世間の因果は「六道の因果」であり、出世の因果は「四聖の因果」である。

「深信因果」の一句に、釈迦一代の聖教が全て含まれる。

c 読誦大乘…大乘經典を受持、読誦、解説、書写すれば往生の業となる。

小乗經典では往生業にならない。

『往生要集』でも、十三種の諸行の一つに読誦大乘を挙げている。

このように、往生の行業は三福に尽きる。

『往生要集』「往生の行業、惣じて之を言わば『梵網』の戒品を出でず。」

「『梵網』の戒品」とは、「具足衆戒」を意味する。

「読誦大乘」「深信因果」「受持三帰」「発菩提心」にも一切教行が含まれる。

『華嚴経』『法華経』は往生を説くため、受持すれば往生できる。

『大般若経』は往生を説かないが、唐土の常敏はそれを書写して往生した。

d 勸進行者…聖道門（八宗九宗）の勸進と浄土門の勸進とがある。

小乗戒の勸進で往生するのは難しい。

浄土門を勸進する方が、少しは往生のためになるだろうか。

房翁は一人に念仏を勸進した功德により、閻魔の庁の庭より往生した。

② 九品（①35、②一、③109、④29、⑤253、⑥171、⑦241、⑧149）

三福と九品とは同じ物である。三福を九品に配当するのである。

A 上品の三生…大乘の善人

a 上品上生…「具三心者」と「三種衆生」の往生。

三心を具える者の往生

善導によれば、三心は九品共通の往生の法則である。その浅深により階位が決まる。

三種衆生の往生

善導「一には但だ能く戒を持ち、慈を修す。

二には戒を持ち慈を修すること能わざれども、但だ能く大乘を誦誦するなり。

三には持戒読経に能わざれども、但だ能く仏法僧を念ずるなり。

此の三人～一日一夜乃至七日七夜、勇猛に勤行すれば、必ず上品上生に生ず。

～日数少しといえども、修行の時節は猛しきが故なり。」

これら三種を同時に行うことはできない。各人が一種を行えばいい。

b 上品中生…理観による往生。

天台の一心三観、真言の阿字本不生など、諸宗の理観は異なる。

善導によれば、観を修さなくても、大乘空の義をよく理解すればいい。

もしくは世間と出世間の苦楽の因果を深く信じて疑わなければいい。

c 上品下生…菩提心による往生。

天台に四種、真言に三種の菩提心があるように、諸宗で異なる。

善導「先ず浄土に生じて～還りて生死に入り、遍く衆生を度せんと欲す。」

B 中品の三生…小乗の善人（①38、②一、③111、④33、⑤257、⑥174、⑦242、⑧159）

a 中品上生…小乗の持戒により往生する人。五戒や八斎戒を守り、五逆を犯していない。

b 中品中生…五戒や八斎戒などを一日一夜守って往生する人。

c 中品下生…世間の仁義礼智信を守る人。臨終に初めて仏教と出遇い、往生する。

C 下品の三生…悪人の往生（①39、②1-100、③111、④33、⑤259、⑥174、⑦242、⑧162）

a 下品上生…十悪の軽罪を多く犯して恥じず、平生に仏教と出会わなかった凡夫の往生。

臨終に善知識と出会い、大乘經典の題名などを聞いて念仏し、往生する。

b 下品中生…戒を破り、上生に次ぐ罪を犯した凡夫の往生。

末法の時代には破戒すらいらないので、正法や像法について説かれたもの。



(『末法灯明記』)

c 下品下生…五逆重罪の凡夫の往生。

『観経』「～至心に声を絶えざらしめ十念を具足し、南無阿弥陀仏と称す。～」

2. 名号を称えて往生すること

(①42、②1-101、③115、④35、⑤264、⑥178、⑦243、⑧176)

(1) 『観経』付属の文(『選択集』第十二章に関連)

経文「～汝、よくこの語を持て。〈この語を持て〉とは、即ち無量寿仏の名を持てとなり。」

善導「正しく弥陀の名号を付属して、退代に流通することを明かす。上来、定散両門の益を説くといえども、仏の本願に望めば、意、衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り。」

『観経』は、初めに広く定散を説くが、後で一向に念仏を選んで、付属し流通している。

「流通退代」とは、法滅後も念仏一行だけを百年間留め置く。遠くを挙げて近くを含める。

「望仏本願」とは、四十八願の第十八願を指す。弥陀の本願の行だから釈尊も付属する。

「一向専称」とは、『無量寿経』三輩段の「一向」を指す。「他を捨てる」という言葉である。

(2) 念仏往生が諸行往生に勝る根拠(『選択集』第十六章に関連、①44、②1-102、③117、④37、⑤267、⑥180、⑦244、⑧183)

①因位の本願…法蔵菩薩が往生行として、他の行を選捨し、念仏一行を選定して立てた。

「選択」というのは『大阿弥陀経』の説。

②光明攝取…阿弥陀仏が因位の本願を還念し、光明によって念仏の衆生を攝取する。

他の行は攝取しない。

③弥陀の自言…『般舟三昧経』で、阿弥陀仏が「当念我名」と言う。他の行は勧めない。

④釈迦の付属…この『観経』に説く、付属と流通の文。他の行は付属しない。

⑤六方諸仏の証誠…『阿弥陀経』で、諸仏が衆生に念仏往生を信じさせるため証誠する。

他の行は証誠しない。

⑥法滅往生…善導『往生礼讃』。末法万年の後、念仏の一行だけが留まり往生する。

余行は異なる。

(⑦) 化仏の来迎讃嘆…『観経』下品上生で、化仏は称名のみを讃える。聞経は讃えない。

(⑧) 無上功德…『無量寿経』の流通分で、釈尊は「一念」を「無上功德」と讃える。

他の行は讃えない。

### 三七日 阿弥陀仏、『双卷経』『阿弥陀経』

○**仏徳讃嘆** 別号「阿弥陀」、光明と寿命の功德

(①46、②1-103、③119、④39、⑤270、⑥182、⑦245、⑧203)

阿弥陀仏の内証や外用の功德は無量だが、要を取れば名号の功德に尽きる。

「阿弥陀」は梵語であり、訳すと「無量寿」、もしくは「無量光」などの十二種の光になる。

阿弥陀仏の全功德の中でも、寿命が根本であり、光明が勝れている。

#### 1. 光明の功德

##### (1) 十二光

- ① 無量光…八万四千相の一々から七百五俱胝六百万の光明を放つ。計算が追いつかない。
- ② 無辺光…量のみならず、照らす範囲にも際限がない。
- ③ 無碍光…日月や灯火のように物に遮られず、極楽と娑婆の間の鉄围山を透かして照らす。
- ④ 清浄光…不淫戒と不慳貪戒により得た光。念仏して光に触れた者の淫貪財貪の罪を滅す。
- ⑤ 歡喜光…不瞋恚戒によって得た光。光に触れた者の瞋恚の罪を滅す。
- ⑥ 智慧光…智慧により愚痴の煩惱を断つて得た光。光に触れた者の愚痴の罪を滅す。

##### (2) 常光・神通光 (①51、②1-105、③125、④43、⑤276、⑥187、⑦246、⑧225)

###### ①常光…諸仏の常光は、遠近長短が異なる。

阿弥陀仏の常光は、八万上下無央数の諸仏の国土に照らさない所がない。

『平等覺経』では頭光を指し、『觀経』では身光と言う。(『往生要集』)

長く不断に照す光である。

###### ② 神通光…特別な時に射す光。

釈尊の神通光は、『法華経』を説く時に東方万八千土を照らした。

阿弥陀仏の神通光は「攝取不捨」の光であり、念仏者がいる時にのみ照らす。

善導「光照の遠近を明かす。」

念仏者が近くにいる時は近くを照らし、遠くにいる時は遠くを照らす。

##### (3) 光明が勝れている理由 (①53、②1-105、③127、④45 ⑤278、⑥189、⑦247、⑧232)

###### ① 阿弥陀の功德の中でも、光明のみが、全ての世界に行き渡る様をはっきり示すから。

###### ② 諸仏の光明の中でも、弥陀如来の光明が特に勝れているから。

『無量寿経』「無量寿仏、威神光明、最尊第一、諸仏光明、所不能及。」

「我說無量寿仏、光明威神、巍巍殊妙、昼夜一劫、尚未能尽。」

阿弥陀仏よりも光明の劣る仏の数を数えるには、昼夜を尽くしても一劫かかる。

(4) 光明の因 (①53、②1-106、③127、④45、⑤279、⑥190、⑦247、⑧237)

- ① 法蔵菩薩の願…四十八願の第十一「光明無量の願」を選択した。
- ② 法蔵菩薩の行…発願の後、兆歳永劫の間、功德を積み重ねた。
- ③ 灯指比丘…過去世で古い仏像を修理したため、指から光を放つことができた。
- ④ 梵摩比丘…過去世で仏に灯明を供えたため、身体から光を放ち、一由旬を照らした。
- ⑤ 阿那律…過去世で仏塔の灯明をかきたてて菩提心を発し、今生で天眼通を身に付けた。
- ⑥ 施主…今回、四十八本の灯明を供養したが、それは光明と天眼を得る因となる。

念仏で往生すれば誰でも三十二相を身につけるが、その光には勝劣の差もある。

2. 寿命の功德 (①56、②1-107、③131、④47、⑤282、⑥193、⑦248、⑧253)

(1) 仏と衆生との寿命に関する四句分別 (源信『阿弥陀経略記』)

- ① 花光如来…仏の命は長く (十二小劫)、衆生の命は短い (八小劫)
- ② 月面如来…仏の命は短く (一日一夜)、衆生の命は長い (五十歳)
- ③ 釈迦如来…仏も衆生も、ともに短い (八十歳)。
- ④ 阿弥陀如来…仏も衆生も、ともに長い (無量歳)。

『無量寿経』「無量寿仏、寿命長久、不可勝計～」

大菩薩は計算できるが、二乗や凡夫には不可能なため「無量」とする。

(2) 寿命が根本である理由 (①57、②1-107、③131、④49、⑤284、⑥194、⑦248、⑧258)

①寿命は能持であり、他の功德は所持だから。

他の一切万徳は、みな寿命によって持続させられている。

もし阿弥陀仏の寿命が一、二劫であれば、今の衆生は念仏往生の本願から漏れてしまう。

よって衆生を救うための方便や大慈悲は、「寿命無量の願」に最も顕著に表れている。

② 娑婆世界の人々が、寿命を最高の宝とするから。

玄奘三蔵ですら、世間の法に則り、寿命を「第一の宝」と言っている。

阿弥陀仏が「寿命無量の願」を立てたのは、娑婆の衆生に欣求の心を発させるためでもある。

寿命無量の功德が最勝であるから、経題も『無量寿経』と言い、『無量光経』とは言わない。

(3) 寿命の因 (①61、②1-108、③135、④51、⑤287、⑥198、⑦249、⑧271)

- ① 衆生に飲食を与え、不殺生戒を守る。食物を与えることは、命を与えること。
- ② 法蔵菩薩の願…四十八願の第十三「寿命無量の願」。
- ③ 法蔵菩薩の行…無央数劫の間不殺生戒を守り、一切の凡聖に飲食物や医薬品を布施した。
- ④ 施主…五十日の法要の間、仏や僧に供養や布施をしたが、それは寿命を伸ばす因となる。

仏願力に依るだけでも無量寿を得る。それらの業因を加えれば、なおさらである。

- (4) 阿弥陀仏の涅槃（『選択集』第十一章と関連、①62、②1-109、③137、④53、⑤290、⑥199、⑦250、⑧280）

阿弥陀仏が涅槃に入り姿を隠すことについて、道綽『安楽集』が「始終兩益」の終益を説く。「一向に専ら念仏して往生したる衆生のみ、常に仏を見奉ること、滅したまわざるが如し。」往生後のことには関心を寄せづらいが、仏と会えなくなる悲しみはつらいものである。釈尊の入滅時には、阿羅漢や高位の菩薩、山河や溪谷、草木や樹林までもが嘆き悲しんだ。また娑婆世界の凡夫は、僅かな間親しく接した者との別離ですら、悲しまずにはいられない。まして極楽で永い間親しく接した後に、阿弥陀仏と会えなくなるのは耐え難いことであろう。念仏の一行によって、変わることなく阿弥陀仏を見ることができるのは、本願だからである。よって往生を願う人は、専修念仏の一門より入るべきである。

### ○経徳讃嘆

1. 『無量寿経』その二（①65、②2-69、③141、④55、⑤294、⑥202、⑦251、⑧292）

- (1) 四十八願（『選択集』第三章と関連）

『無量寿経』は浄土三部経の根本である。なぜなら一切の諸善は願を根源とするからだ。

#### ① 発願

A 『無量寿経』に基づく、発願の経緯の説明

はるか昔、世自在王仏という仏がおられた。その時、一人の国王がいた。（中略）

五劫の間、思惟し取捨し、二百一十億の国の中より選取して、四十八の誓願を設けた。

B 『大阿弥陀経』に基づく、「選択」の説明

善悪の中では、悪を捨て善を取る。粗妙の中では、粗を捨て妙を取る。

このように取捨し選択して、四十八願を発したので、「選択の願」と言う。

- ② 選択の内容（①66、②2-69、③141、④57、⑤296、⑥203、⑦251、⑧299）

A 第一「無三悪趣の願」

三悪道のある国土を選捨て、三悪道のない国土を選取して、自分の願とする。

B 第二「不更悪趣の願」

三悪道にかえり堕ちる国を選捨て、三悪道にかえらない国土を選取して、自分の願とする。

「悉皆金色の願」や「無有好醜の願」など、一々の願も、皆なこのように理解できる。

C 第十八「念仏往生の願」

他の行を往生行とする国を選捨て、名号を往生行とする国を選取し、自国の往生行とした。

「来迎引接の願」や「係念定生の願」もみな、このように摂取して願を立てた。

- ③ 四十八願の法門（①68、②2-70、③143、④57、⑤299、⑥205、⑦252、⑧305）

法蔵菩薩は四十八願を選択摂取した後、世自在王仏の前で報告をし、四誓偈をとらえた。

すると大地が振動し、天から花が降り、「決定して必ず無上正覚を成ずべし」と予言された。

このように、法蔵菩薩の四十八願が成就することは、誓った時すでに明白であった。  
世自在王仏の仏法では、この経を『法蔵菩薩の四十八願経』と呼び、受持、読誦した。  
今、釈尊の仏法においても、極楽に往生したい者は、この法蔵菩薩の四十八願の法門に入れ。  
道綽や善導なども、この法蔵菩薩の四十八願の法門に入った。  
華嚴宗の人は『華嚴経』、三論宗の人は『般若経』を持つなど、各宗に所依の経論がある。  
今、浄土を宗とする人は、この経を依り所として、四十八願の法門を持つべきである。

(2) 第十八願「念仏往生の願」(『選択集』第三章と関連、①69、②2-71、③145、④59、  
⑤301、⑥207、⑦252、⑧312)

①第十八願を以て、四十八願の体となす

善導「弘誓多門四十八、偏に念仏を標して、最も親しとす。」

他の経に説かれる念仏往生も、すべてこの『無量寿経』の第十八願を根本とする。

A『観経』真身観「光明攝取」の文

善導「ただ念仏のみ有りて光照を蒙る、当に知るべし、本願最も強しとす。」

本願であるから、光明も攝取する。

B『観経』下品上生の文

聞経と称名とを並べて説くが、称名念仏の功德のみを讃える。

善導「仏の願意に望めば、唯だ正しく称名のみを勧む。～」

本願であるから、称名念仏のみを讃える。

C『観経』付属の文

善導「仏の本願望めば、意、衆生をして一向に専ら弥陀の仏名を称せしむるに在り。」

本願であるから、釈尊も付属し流通する。

D『阿弥陀経』一日七日念仏の文

善導「弥陀の弘誓重きが為に、凡夫をして念ずれば即ち生せしむることを致す。」

一日七日の念仏も、本願であるから往生する。

E『無量寿経』三輩以下の文…みな本願による。

② 余行を捨て、称名念仏の一行を本願とした理由

(①70、②2-71、③147、④59、⑤303、⑥208、⑦253、⑧321)

A殊勝の功德であるから

一切の万徳が悉く名号に顕れるので、一度でも「南無阿弥陀仏」と称えれば大善根を得る。

『西方要決』「諸仏の願行、此の果名を成ず。但だ能く号を念ずるに具に諸徳を包ぬ。～」

『無量寿経』では「一念」を指して「無上功德」だと讃えている。

B念仏は行じ易く、諸機に行き渡るため

a 称名…愚痴の者も、老いも若きも、簡単に称えられる。

b 布施…貧窮困乏の輩は、往生の望みを断つ。

c 持戒…破戒や無戒の類は、やはり往生の望みを断つ。

d 禅定…散乱麁動の輩は往生できない。

e 智慧…愚痴下智の者は往生できない。

布施や持戒などの諸行に堪えられる者は少なく、貧窮、破戒、散乱、愚痴の輩は甚だ多い。

法蔵菩薩は平等の慈悲により、一切をすくうため、称名念仏の一行をその本願とした。

法照『五会念仏法事讃』「～能く瓦礫をして、変じて金に成ぜしむ」

### ③願の成就

このような願を立てても、成就しなければ、確かな依り所とはならない。

だが、一々の願は成就し、法蔵菩薩は既に成仏している。

「念仏往生の願」成就文

「諸有衆生聞其名号、信心歡喜乃至一念、至心廻向願生彼国。即得往生住不退転。」

- (3) 三輩の往生（『選択集』第四章と関連、①72、②2-73、③149、④63、⑤308、⑥211、  
⑦253、⑧331）

三輩に、みな「一向専念無量寿仏」という。

善導「上来定散両門の益を説くと雖も、仏の本願に望めば、意、衆生をして一向に専ら弥陀  
仏の名を称ぜしむるに在り」

「望仏本願力」とは、三輩の中の「一向専念」を指す。

- (4) 流通分（①73、②2-73、③149、④63、⑤309、⑥212、⑦254、⑧334）

#### ① 無上功德の文（『選択集』第五章と関連）

經文「其有得聞彼仏名号、歡喜踊躍乃至一念、当知此人為得大利、即是具足無上功德。」

善導の解釈では、「上尽一形、下至一念」の無上功德である。

余師の解釈では、ただ少数を挙げて多数を含める。

#### ② 特留此經の文（『選択集』第六章と関連）

末法万年後、三宝滅尽の時の往生について考え、一向専念の往生の義を顯すのである。

A 諸行…行じること自体が不可能になる。

菩提心を説く經がすべて滅ぶならば、何によって菩提心の行相を知るのか。

大小の戒經がすべて失われるならば、何によって二百五十戒を持つのか。

仏像がないのだから、造像起塔の善根もない。持經や持呪なども同様である。

B 念仏…その時でも、一念すれば往生できる。

善導「尔の時に聞きて一念せんも、皆な当に彼に生ずることを得。」

今の時代の念仏者が、他の善根を塵ほども具さなくても、必ず往生するのである。



菩提心や戒、智慧などがないと往生できないと言う人は、経を理解できていない。懐感「説戒受戒も皆成ずべからず、甚深の大乗も知るべからず。故に先だて隠没して世に行なわれず。但だ念仏のみ覚り易し、浅識の凡愚、尚お能く修習して利益を得べし。」

菩提心も戒も智慧もない者が、称名念仏一行を修して、一声に至るまで往生する。これも弥陀の本願だからである。本願が遠くまで一切をおさめ取るのである。

## 2. 『阿弥陀経』その二 (①75、②2-74、③151、④65、⑤312、⑥213、⑦254、⑧343)

### (1) 念仏多善根の文 (『選択集』第十三章と関連)

经文「少善根、福德因縁を以て彼の国に生るることを得べからず。舍利弗、若し善男子、善女人有りて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること、若しは一日、乃至七日」

善導「随縁の雑善、恐らくは生じ難し、故に如来をして要法を選ばしむ」

よって『阿弥陀経』は、少善根である雑善を捨てて、もっぱら多善根である念仏を説く。

『龍舒の浄土文』には「専持名号以称名故、諸罪消滅、即是多善根福德因縁」とある。

たとえその文を足さなくても、意味を考えれば、念仏は多善根ということになる。

### (2) 六方諸仏の証誠 (『選択集』第十四章と関連、①76、②2-74、③151、④65、⑤313、⑥214、⑦254、⑧348)

『無量寿経』や『観経』では他の行も説くため、念仏のみを証誠することができない。

だが『阿弥陀経』は、ただ一向に念仏を説いている。よってこの経を証誠するのである。

「証誠」の語は『阿弥陀経』にあるが、その義は『無量寿経』や『観経』にも行き渡る。

さらに言うと、念仏往生を説く経には、必ず六方の如来の証誠がある。

天台智顗『十疑論』

「『阿弥陀経』『大無量寿経』『鼓音声陀羅尼経』等に云く、釈迦仏、経を説き給う時に、十方世界に各恆河沙の諸仏有まして、其の舌相を舒べて遍く三千世界に覆いて、一切衆生の、阿弥陀仏の大願大悲の願力を念ずる故に、決定して極楽世界に生まるることを得と、証誠したまえり。」

(さいとう むこう 嘱託研究員、東海学園大学共生文化研究所講師)